「が」準体助詞の遺存分布考

――主として中部地方域方言について――

江端義夫

日本語方言研究上注目される「が」準体助詞の用法と分布相とについて、方言地理学的考察を行なうのが、本稿の目的である。[注(1)]

筆者は、一九七六年三月から十月まで、中部地方九県域（愛知県、岐阜県、静岡県、長野県、山梨県、新潟県、富山県、石川県、福井県）の方言臨地調査に従い、方言地理学的研究を行なった。そのさい、一六七の調査表現を地点から、統一質問項目「これは私のです」に対応する土地の方言表現を得て、方言分布地図を作製した。また、右の調査期間および一九七四年に、自然傍受調査を行ない、「が」準体助詞の文表現資料を採録した。筆者は、これらの原資料にもとづいて、以下の考察を行なう。

一、中部地方域方言における「が」準体助詞の用法[注(2)]

「が」準体助詞の用法は、中部地方域において、大略、以下の三つに分類される。

㈠純然たる準体助詞としての「が」
㈡接続助詞の一部（形成素）としての準体助詞「が」
㈢文末詞の一部（形成素）としての準体助詞「が」

以下、具体事例に即して、「が」準体助詞の生活を記述する。

㈠純然たる準体助詞としての「が」

1、「が」に指定の助動詞が承接する場合

a「がや」

富山県、石川県下では、「ガヤ」が、よく行なわれている。これは、ほぼ、共通語の「（も）のだ」にあたる。

○ナマリベンデ　ヤルガヤカラ……。　訛りことばで、話すものだから…。（老男）　氷見　一九七四　※以下、富山県氷見市中田と氷見市袋とを合わせて、「氷見」と略称する。

○イマー　ナイガヤ。　いまは、無いのだ。（老女）　富山県下新川郡宇奈月町音沢　一九七四　※以下、音沢と略称する。

○タヨラエンガヤカラ　ナー。　頼られないのだからねえ。（中男）　音沢　一九七四

○ワルイ　ニンゲンガ　デキレバ　ワリーガヤドモー……。　悪質（性）の人間が出きれば、いけないのだけれども…。（中男）　音沢　一九七四

金沢市寺町では、つぎのように、能登でさかんな「トコトー」文末詞の、「ガヤ」に承接する事例が聞かれた。

○クルマニ　ヨワイガヤ　トコトー。　車酔いに弱いのだよね。（老女）　筆者）　金沢市寺町　一九七六

指定の助動詞「ヤ」に、ていねいの助動詞「デス」の承接することもある。

○チョクツーノ　バス　ナイガヤデショ　直通のバスは無いのでしょ？（老女）金沢市寺町　一九七六

b「がじゃ」

○エーガジャ　ノー。　いいのだねえ。（老男）富山県下新川郡宇奈月町内山

「がじゃ」の類例は、少ない。その理由は、「ジャ」が避けられ、「ヤ」または「ダ」が使用されるからである。

c「がです」

○キレーナ　コトバニ　ナッタガデス。（昨今は）きれいなことばになったのです。（老女）石川県鳳至郡能都町宇出津　一九七六

○ハラガ　イタイガデス　チャー。　腹が痛いのですよ。（老女）氷見　一九七四

○ヨー　ニトルガデスケドー　……　よく以ているのですけど…。（老女）氷見　一九七四

これらは、準体助詞「が」の、一般的な用法である。次は、共通語の準体助詞「の」には見られにくい用法が、当域の準体助詞「が」に、認められるばあいである。

○ソンナガデス。　そうです。（老女）氷見　一九七四

○ソンナガデス　チャー。　そうですとも。（老女）氷見　一九七四

○ソンナガデス　カー。　そうですか。（老女）氷見　一九七四

○ソレガデス。　それ（そう）です（老男）氷見　一九七四

○ソヤガデス。　そうなのです。（老男）氷見　一九七四

○ソヤガデス　チャー。　そうなのですとも。（老男）氷見　一九七四

これらは、応答文である。「そうです」と言ってもよいものばかりである。しかし、かくも微妙にニュアンスを変えて応答しうるところに、当該地域方言表現の特色を認めることができるとされよう。

d「がだ」・「がでぁ」

○ワリャ　ドコエ　イクガダー。　おまえは、どこへ行くのだ。（老女）新潟県糸魚川市上刈　一九七六

指定の「ダ」が、もっぱら疑問の意味作用を受けもつようになっている。

○ドコ　イクガデァ。　どこへ行くのだね。（老女）音沢　一九七四

指定の助動詞の古形「デァ」が、富山県東部に存在することが、注目される。

e「がんだ」

新潟県下では、富山県石川県下で「ガ」と言うところを、「ガン」と言う。土地人はそれを、「越後のガンは、食わんネー　ガンダ」などと教示する。「ガン」は、次のように行なわれている。

○セァーガンダ。　そういうことだ。（老女）新潟県西蒲原郡岩室村　一九七六

○マルデ　カワッテルガ　ドイガンダ。　まるで変わっているが、どういうことだ？（老女）新潟県中魚沼郡津南町　一九七六

2、「が」に格助詞が承接する場合

a「がに」

「がに」は、北陸地方で行なわれている。「ガニ」と「ガン」との2形がある。これらが文表現中に生きた時、「～のように」「～ぐあいに」「～状態に」「～ために」などの意味作用が、醸成される。

○キット　エーガニ　ナッテク。　（まじめにやっていれば、）きっと、いいぐあいになっていく。（老女→筆者）石川県河北郡内灘町大根布　一九七六

○コー　ユー　デンチューガニ　ナットル　ガ。　こういう機械のようになっているでしょ！（中男）音沢　一九七四

○シェンデモ　エーガニ　ナットル。　しなくてもいいようになっている。（中男）音沢　一九七四

○マダ　イーガニ　ツカンモンデ　ネー。　まだ、いいぐあいに電気がつかないものだからね。（老女→青男）輪島市河井新田町　一九七六

○タタレンガニー　タタレンガニ　ナルモンデス。　立たれないように、立たれないようになるものです。（老女→筆者）石川県鳳至郡能都町宇出津　一九七六

○イチダイ　タテルガニ　フコーナ　ジンセーヤッタ……。　一代を建てるために、不幸な人生を送ったと悔まれて…。（老女）石川県鳳至郡能都町宇出津　一九七六

○タンボガ　エーガン　ナットル　ノー。　田んぼが、いいぐあいになっているね。（中男）石川県下新川郡宇奈月町内山　一九七四

「がに」は、石川県富山県下で、わりに、よく行なわれているものである。

b「がと」

○ヒガシカラ　クルガト　キタカラ　クルガト　アル　ガネ。　風は東から吹いてくるのと、北から吹いてくるのとがあるね。（老男）氷見　一九七四

「がと」は、富山県石川県下に行なわれている。「がと」は、「がに」ほど多くは、聞かれない。

(二)接続助詞の一部（形成素）としての準体助詞「が」

準体助詞「が」が、接続助詞の一部を形成し、接続助詞としての機能の生成に助することがある。私どもは、ここに、準体助詞「が」が転じて、接続助詞の一部となっている事実を認めることができる。注(3)

1、順接法

a「がで」

○キョネン　イカナンダガデ　ネーン。　去年行かなかったのでねえ。（老男）氷見　一九七四

○ネーガデ　カッシャイ　ヨー。　無いから行きなさいよ。（老女）音沢　一九七四

○エ[e]・ー　トコガ　ネーガデ　ネァ。　いい所がないのでね。（中女→中女）魚津市相ノ木　一九七六

○テーリューショガ　アルガデ……。　停留所があるから…。（老男→筆者）氷見　一九七四

○シンタクエ　イットルガデ……。　新宅（分家）へ行っているから。（老男）氷見　一九七四

共通語の「ので」「から」にあたるのが、当該方言の「がで」であろう。これはよく聞かれるものである。

b「がなら」

○オマイ　イクガナラ　オレモ　イッチャー。　おまえが行くのならおれも行くよ。（老男）富山県下新川郡宇奈月町内山　一九七四

○オマイ　イクガナラ　オレモ　イク　バイ。　おまえが行くのならおれも行くよ。（老男）富山県下新川郡宇奈月町内山　一九七四

条件表現を仕立てるのに、「がなら」という接続助詞が用いられている。

2、逆接法

a「がに」

○ホカノ　トコニ　ツカッテ　オレバ　イェ[je]ーガニト……。　ほかの所に使っておればいいのに、と…。（中男）一九七四

○ラクナガニー……。 楽なのにね。（初老女） 氷見 一九七四

○オトコノ コナラ オトコノ コガ デキテ メデタカッタガニー。 男の子供なら、男の子ができて、めでたかったのにね。（老女） 石川県鳳至郡能都町字出津 一九七六

b「がいど」

○タバコモ ツクットラシタガイド……。 煙草も栽培していちしたのだけれど…。（老男） 氷見 一九七四

「～のだけれど」が、「～がいど」と対応する。

c「がけど」

○オレ シランガケド……。 おれは知らないのだけれど…。（老女→筆者） 石川県珠洲市飯田町 一九七六

関西地方で「シランケド」と言うところを、能登では、たとえば、「シランガケド」のように、「が」が挿入される。かかる「ガ」志向の表現形質は、富山県石川県下の特色とも見られようか。

㈢文末詞の一部（形成素）としての準体助詞「が」

日本語方言上の諸品詞には、文末に位置して、相手への訴えかけ機能をのみ負う方向へと転化する傾向が、少なからず見られる。「が」準体助詞も、中部地方域方言で、文末詞形成の一要素となっている。

中部地方域方言において注目される若干のものは、以下のとおりである。

a「ガカー」「ガケ（ー）」「ガケァー」

「ガカー」文末詞は、よく行なわれて、質問表現を醸成する。

○アンタ シツモン シル ガカー。 あなたは、質問をするのか？（老女→中女） 富山県小矢部市末友 一九七六

○トコロモ ナモ ワカラン ガカー。 （落し主の）住所も名もわからないのか？（初老女→初老男） 石川県鳥越村別宮 一九七六

「ガケー」には、質問表現を醸成するばあいがある。

○アツイ ノー。ワリャー ドコ イク ガケー。 暑いねえ。おまえはどこへいくのかい？（初老男） 富山県下新川郡宇奈月町円山 一九七四

○ドコ イク ガケー。 どこへ行くのかい？（老男） 氷見 一九七四

また、次のように、平叙表現を醸成するばあいもある。

○アスコニ モモ アル ガケ。 あそこに、桃があるのよ。（中女→中男） 富山県下新川郡嵜日町 一九七六

「ガケァー」は、次のように行なわれる。

○ナニガ ホシー ガケァー。 何がほしいの？（老女→老女） 珠洲市飯田町 一九七六

b「ガヨー」

「ガヨ」は、主張性が強い。平叙と質問との両用が認められる。

○ソユ ガヨ。 そういうことだよ。（老男） 音沢 一九七四

○ビラ ナニ ヤットル ガヨー。 おまえらは、何をしているのか？（老女） 音沢 一九七四

○ワレァー ドコ イク ガヨー。 おまえは、どこへ行くんだい？（老男） 音沢 一九七四

c「ガゾ」

共通語的発想では、「ゾ」だけで文意が通るところを、当該方言で「ガゾ」としている点に、特色がある。

○ビールデ ネー ガゾ。 ビールではないんだよ。（中男） 氷見 一九七四

d「ガチャー」

「ガチャー」は、「がと言えば」の転化したものである。取りたてや念押しの意が、あらわである。

○エサ　ワスレテ　キタ　ガチャー。　餌を忘れてきたよ。（中男→中男）

富山市森　一九七六

以上、中部地方域の石川県、富山県、新潟県下に隆盛な「ガ」準体助詞の用法について、考察した。

二、中部地方域方言における「私のです。」諸事象の分布について

本節では、中部地方域方言における「これは、私のです。」の準体助詞「の」に相当する諸事象の分布について考察する。

1、諸事象の分類

図1の分布事象を分類すれば、四類が見定められる。

○「ガ」（「ガ」）類

○「ガン」類

○「ノ」類

○その他

これらのうち、「ガ」（「ガ」）類と「ガン」類とは、同系統のものであるが、両者の分布域は、明らかに相違する。

以下、各類毎に、具体的諸事象について、分布の考察を行なう。

2、「ガ」（「ガ」）類諸事象の分布解釈

「ガ」（「ガ」）類には、「ガ」「ガ」と、「ノガ」「ンガ」「ンガ」「ノゲ」との諸事象が見られる。

a「ガ」（「ガ」）について

図1では、「ガ」（「ガ」）が、次の地点で行なわれている。

石川県では能登半島外浦の輪島市町野町曽々木、および白山麓の秘境の石川郡白峰村大字白峰に、「ガ」がある。富山県では、五箇庄の上平村字細島に、これがある。岐阜県では、富山県との県境に近い山間の地、吉城郡宮川村字杉原に、これがある。新潟県では、糸魚川市上刈に、「ガ」がある。長野県では、特異な方言として注目される木曽郡開田村字把ノ沢に、「ガ」がある。山梨県では、早川町奈良田の下流に位置する山間の小集落、南巨摩郡早川町薬袋（ミナイ）に、「ガ」がある。静岡県では、安倍川の最上流で、山梨県と接した梅ケ島に、これがある。

以上、8地点で、筆者は、当該質問文によって、「ガ」（「ガ」）準体助詞の存在を確認しえた。各分布地点は、中部地方にあって、辺境地とされる場所である。「ガ」（「ガ」）の古態遺存の様が、窺い知られよう。中部地方の広い範囲にわたって、交通の不便な僻地に、孤立的に「ガ」（「ガ」）が存する事態によって、私どもは、次のような解釈をすることが許されよう。

かつて、「ガ」（「ガ」）の隆盛な時期が、中部地方にあったけれども、強力な「ノ」類の伝播のために漸減し、今や、それは、著しい残存分布を呈するに至ったのであろう。

b「ノガ」について

「ノガ」は、富山県で8地点、石川県で8地点に分布している。この2県以外には、これが聞かれなかった。

「ノガ」が、「ガ」（「ガ」）よりも後生のものであることは、「ノガ」が「ガ」（「ガ」）の分布域内に抱き包まれた分布様相を示していることによって理解される。元来、「私『ガ』です。」と言って済ましえたものを、「私『ノガ』です。」と、論理の明断化

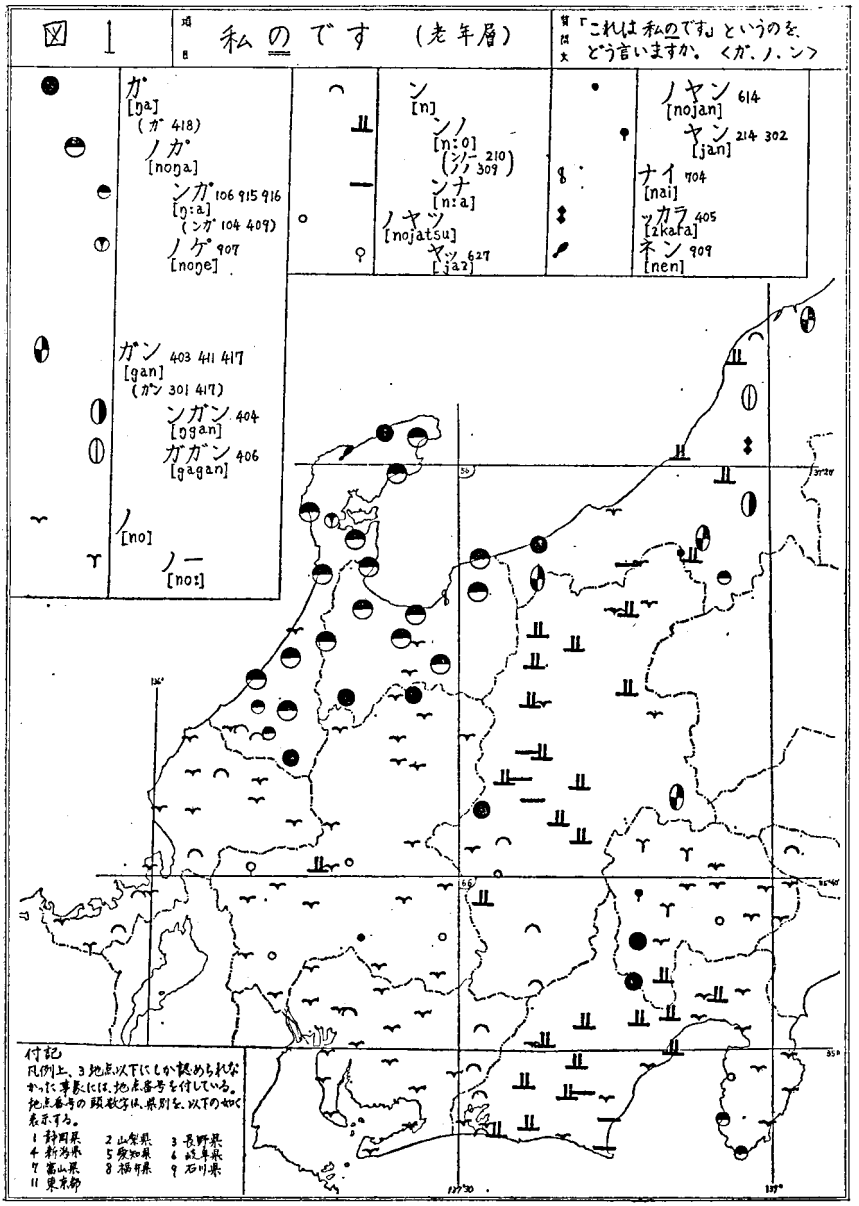


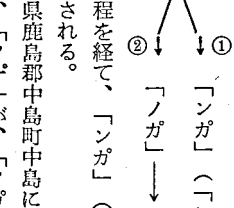
図 1
項目 私のです（老年層）
質問文 「これは私のです」というのを、どう言いますか。<ガ、ノ、ン>
ガ [ga] (ガ 418)
ノガ [noga]
ンガ 106 915 916 [ŋ:a] (ンガ 104 409)
ノゲ 907 [noge]
ガン 403 411 417 [gan] (ガン 301 417)
ンガン 404 [ŋgan]
ガガン 406 [gagan]
ノ [no]
ノー [no:]
ン [n]
ンノ [n:o] (ンノ 210 309)
ンナ [n:a]
ノヤツ [nojatsu]
ヤッ 627 [jaz]
ノヤン 614 [nojan]
ヤン 214 302 [jan]
ナイ 704 [nai]
ッカラ 405 [zkara]
ネン 909 [nen]
付記
凡例上、3地点以下にしか認められなかった事象には、地点番号を付している。地点番号の頭数字は、県別を、以下の如く表示する。
1 静岡県 2 山梨県 3 長野県
4 新潟県 5 愛知県 6 岐阜県
7 富山県 8 福井県 9 石川県
11 東京都

に従ったのであろう。「ノパ」があれば、「パパ」も存立していそうである。しかし、筆者のこの度の調査では、それを採録しえていない。

c「ンパ」（「ンガ」）「ノゲ」について

「ンパ」が、静岡県賀茂郡松崎町江奈、石川県小松市大杉本町、同小松市金平町にある。「ンガ」が、静岡県賀茂郡南伊豆町大瀬、新潟県南魚沼郡湯沢町三俣にある。

かかる広域の分散的な分布様相から見て、「ンパ」（「ンガ」）の成立は、単純に「ノパ」（「ンガ」）からの音転ばかりではあるまい。次のような「ンパ」生成の図式が推定される。



右のような①②の過程を経て、「ンパ」（「ンガ」）の遺存状況が醸成されていると解される。

「ノゲ」は、石川県鹿島郡中島町中島にある。周辺が、みな「ノパ」であることから、「ノゲ」が、「ノパ」からの派生形であることは、自明とされよう。

3、「ガン」類諸事象の分布解釈

「ガン」類諸事象は、そのほとんどが、新潟県に分布する。具体的に各事象毎に考察すれば、以下のとおりである。

「ガン」が、新潟県豊栄市前新田、新潟県中魚沼郡津南町陣馬下、新潟県糸魚川市小滝にある。「ガン」は、長野県南佐久郡相木村中島と新潟県南魚沼郡大和町浦佐とにある。「ガガン」は、新潟県南蒲原郡栄村千把野にある。

長野県の一地を除いて、「ガン」類は新潟県下にある。新潟県下には、「ガ」や「ンガ」も分布していた。新潟県では、「ガ」の古層の上に、「ガンを生成せしめ、広く伝播受容したのであろう。富山県や石川県では、「パ」の古層の上に、「ノパ」を創生せしめたのであろう。両県間に方言気質の差が感得されよう。

「ガン」は「ガノ」が原形とされよう。「ガノ」は発音生活上、すぐにも、鼻音化を起して、「ガン」となりやすいものではある。ただし、筆者は「ガノ」を採録しえていない。「ンガン」「ガガン」の存立は、「ガン」（「ガン」）にも増して、新潟県地方域の特色ある方言性を、示唆していよう。

「ガン」類諸事象は、新潟県下の分布においても、衰退の様相を示している。海岸地方には、「ノ」類の事象その他が分布する。新潟県の「ガン」類諸事象は、富山県、石川県の「ノパ」類諸事象よりも、早く衰退の途を進んでいるようである。

4、「ノ」類諸事象の分布解釈

「ノ」類には、「ノ」、「ノー」、「ン」、「ンノ」（「ンノー」「ノノ」）、「ンナ」の諸事象がある。

「ノ」は、中部地方域のほぼ全域に分布する。しかし、石川県富山県では、「パ」（「ガ」）類の諸事象の強力な分布があるため、「ノ」は、稀にしか聞かれない。新潟県下でも、これは少ない。

「ノー」が、図1では、山梨県の3地点（西八代郡市川大門町、甲府市御岳町、北巨摩郡長坂町）と、福井県の1地（遠敷郡上中町天徳寺）とに見られる。「ノ」の共通言語地盤上の遠隔2地域で、「ノ」の改新現象が起ったのであろう。「私ノーです」の言いかた

は、「ノ」の長呼が耳立たしく特異である。この新奇な事象の創出が、注目される。

「ン」は、「ノ」の慣用によって生成される自然な訛音である。当該域での「ノ」の分布の圏内で、「ン」が、わずかに分布する。

「ンノ」（「ンノー」「ノノ」）が、静岡県、長野県、新潟県に、顕著な分布を示す。「ノノ」（長野県上水内郡牟礼村牟礼）は、「ノ」準体助詞の重出である。「ノ」志向の方言性が、とりわけ強く、上の3県域に見られるとされよう。「私ノです。」や、「私ンです。」における訴えの弱さを補強するため、「私ンノです。」が創出せしめられたのであろう。関東地方域をとりまいて、「ンノ」が存立している事態は、中部地方域にあって、これが、東方に発想の基底を持つものであることを示している。

「ンナ」は、「ンノ」と併存の状態で、3県（静岡県、長野県、新潟県）域にある。「ンノ」をさらに、「ンナ」に変えていく発想心理を見ていると、まさに、方言事象を改新しようとする創作力は、無限であると痛感される。「ン」の如き単純な一言語単位では、たよりないとするのか、複雑化へ向かわしめられることがあり、「ンナ」まで至る。言語の変化が、簡↓錯（綜）↓簡の過程をたどるとすれば、今後、右の事象がどのような異態を示すか注目されよう。

5、その他の事象の分布解釈

「ノヤツ」の類に属する「ヤッ」、「ノヤン」、「ヤン」が、拡散的に見られる。「ナイ」が富山県の1地にあり、「ッカラ」が新潟県の1地にある。「ネン」という近畿的な事象が、能登の1地にある。右の諸事象相互の連関は、認められない。

以上、「ガ」類および「ノ」類以外の準体助詞が、中部地方域では、極めて稀であることが、注目される。

三、「私のです。」における「私」と「の」との主として待遇関係分布

上述の考察では、質問文「私のです。」における「が」を注視点にした。本節では、同一質問文における、第一人称代名詞「私」の方言分布相（図2）を、図1のと比較しつつ考察しようとする。

図1の方言事象分布相と、図2の方言事象分布相とを重ねあわせると、次のことが、指摘される。

1、図1における「ガ」類、「ガン」類の準体助詞諸事象の分布地域と、図2における「オラ」「オリ」「ウラ」「ギラ」または「オレ」の分布地域とが、対応して見られる。これらの自称代名詞は、土地での待遇品位が、高いものではない。品格の低い自称代名詞と連れそって、「ガ」類「ガン」類の準体助詞が分布する。

北陸で、無飾の自称代名詞に続けて、「が」類の準体助詞を承接せしめることを慣用としているのは、古来の待遇表現生活を守っ[注(5)]ているからであろう。

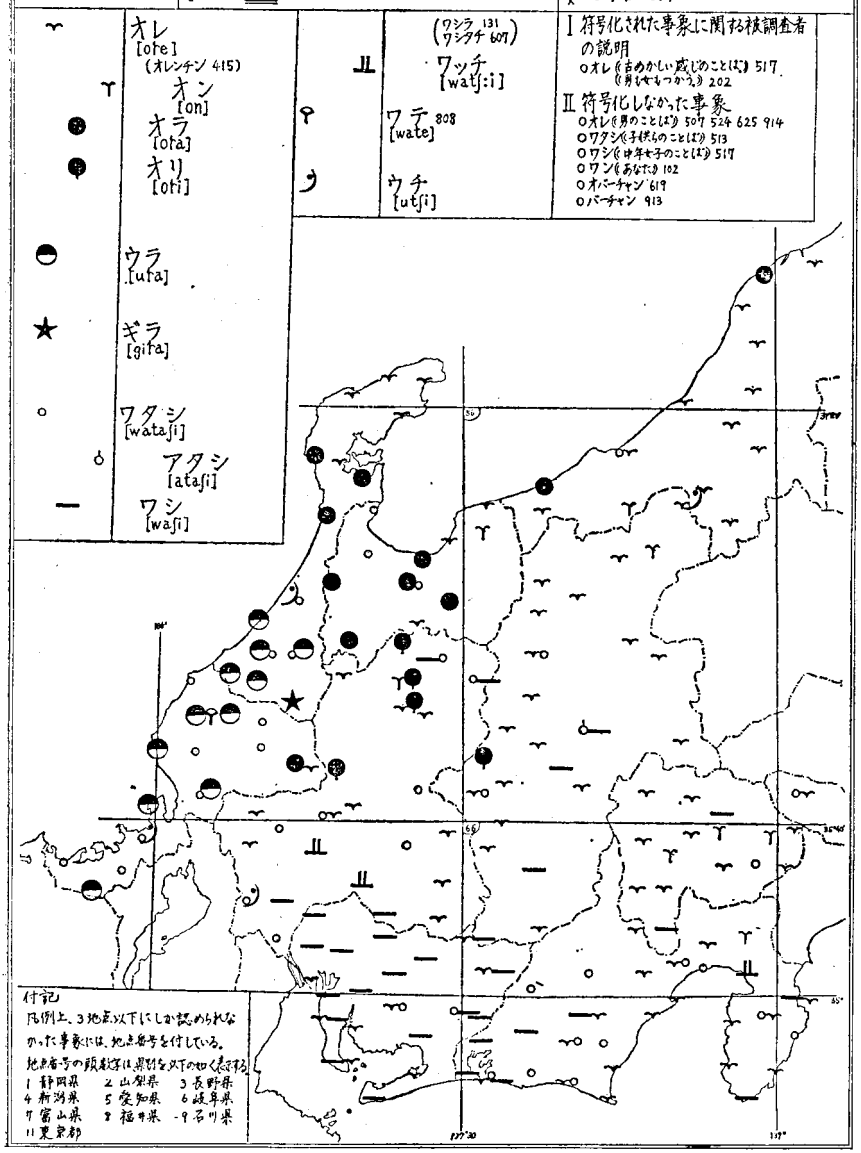
自称代名詞＋「の」とする今日的な表現形式をとる地方には、もはや、助詞「の」と、助詞「が」との待遇品位差への顧慮が、なくなっているのであろう。

2、図1での、準体助詞「ノ」は、全域的分布を示して、図2での、「オレ」と対応する。「オレノ」という言語形式が、中部地方域での、老年女子の、代表的な主体的表現とされる。

図 2

項目 私のです（老年層）

質問文 「これは私のです。」というのを、どう言いますか。



3、富山県、石川県、新潟県、福井県に分布した「オラ」は、同域で、「ノパ」と連鎖することが多い。「オラ」⟷「ノパ」の対応関係の緊密さが指摘される。

4、「ウラ」は、福井県下で、「ウラノ」「ウラン」となりがちである。加賀においては、「ウラ」が「ノパ」「ンパ」と結びあいがちである。

5、北陸4県（富山県、石川県、福井県、新潟県）には、「オラ」「ウラ」「ギラ」が、特色ある分布を見せた。これらに共通するのが、「〜ラ」である。2拍めを「ラ」とする自称代名詞の存立は、他の中部地方域共通の「オレ」など、2拍めを「レ」とするばあいと対立するものである。

四、日本語方言上での「が」準体助詞の分布

準体助詞「が」が、日本語方言上で、どのような存立状態を見せているかを、以下に考察する。

まず、関東地方域の、大橋勝男氏著『関東地方域方言事象分布地図』第二巻では、「が」準体助詞の分布が、認められる。

瀬戸内海域での、藤原与一先生著『瀬戸内海言語図巻』上巻37図37'図「来たのに」では、老年層図において、「キタガニ」が、愛媛県の佐田岬半島辺の3地点（西宇和郡明神、西宇和郡三机、喜多郡櫛生）に分布する。その他の瀬戸内海島嶼および沿岸には、これが分布していない。少年層図においては、これが先の3地点のうちの1地点（喜多郡櫛生）に分布するだけになっている。以上、瀬戸内海域における「が」準体助詞は、南予と言われる地域の特色を示すものと言えよう。南予の西端に、三崎町がある。

筆者は、昭和46年8月に、愛媛県西宇和郡三崎町の言語地理学的調査を試行した。そのさい、三崎町[注(6)]全域で、「が」準体助詞のさかんな表現生活に接した。それは、以下のとおりである。

一つは、純然たる準体助詞としての「が」である。

○オーキーガン　ナルト　ジュッキログライヤナ。　大きいのになると、10尺ぐらいだね。（中女→筆者）正野

○ヤットゥシカ　イレンガジャケン……。八つしか入れないのだから……。（中女→中女）正野

○ブラクワ　オナシガヤケン……。部落は同じところだから。（青男→青男）正野

他の一つは、文末詞の一部（形成素）としての準体助詞「が」である。

○イキヨル　ガゼー。　行きつつある(の)よ。（中女→中女）正野

○イノシシモ　デル　ガゼ。　猪も出る(の)よ。（青男→青男）正野

○アレー　オーゴト　ナル　ガゼ。　あれは、たいへんなことになる(の)よ。（老男→青男）松

○フッコンダラ　エー　ガヤ。　吹きこんだらいいんだ。（老女→筆者）名取

○ピシャット　イケン　シマス　ガヨ。　ひしゃっと、忠言をします(の)よ。（老女→筆者）井之浦

○ブラクノ　カオガ　アル　ガヨ。　部落ごとに、部落の顔がある(の)よ。（中男→中男）松

○オモーチョル　ガヨ。　思っている(の)よ。（中男→中男）松

○オガミオル　ガヨ。　（かまきりが）おがんでいる(の)よ。（老女）名取

また、愛媛県では、喜多郡[注(7)]下、西宇和郡下ばかりでなく、北宇和

郡三間町務田でも、「が」準体助詞が聞かれる。

○ソリャー　オランンガゾー。　それは、私のだぞ。（老男）一九七八

○ソリャー　オランンガジャー。　それは、私のだ。（老男）一九七八

これらは、純然たる準体助詞「が」の認められるものである。つぎのは、「が」準体助詞が、接続助詞の一部（形成素）として機能しているものである。

○ドーシテモ　コーシテモ　クニニ　ヒツヨーナ　飛行場を　ツクリオルンガニ　ハンタイオ　ヒテ　テットーンニ　ノボッテ……。　是が否でも、国に必要な飛行場を作るのに、反対をして鉄塔に登って…。（老男）一九七八

高知県域では、「が」準体助詞を使う生活が顕著である。

高知県の西端に近い中村市右山では、次のように、「が」準体助詞が、さかんに使われている。

○ウキョーク　サキョーク　アノー　マネタンガ　トー。　中村市内の地名「左岡」は、右京区や左京区を、真似たんだって。（老男→筆者）一九七八

○ムカシカラ　オッタンガヤ　ネー。シラン　ムカシカラ　ネー。　昔から、（私の先祖は、この地に）いたのだねえ。（私の）知らない昔からねえ。（老男→筆者）一九七八

これらは、純然たる準体助詞「が」の見られるものである。

○ウチラ　ムカシカラ　アノー　アルンガデ　ネー。　私らは、昔からあのう、（姓が）あるのでね。（老男→筆者）一九七八

○サンジューナンチョーブ　アノー　アルンガケー　ネー。ウヤマナー。　30余町歩、あのう、あるんだからねえ。右山の田地は。（老男→筆者）一九七八

これらは、「が」準体助詞が、接続助詞の一部を形成しているものである。

○ムカシワ　ネー。　アノー　ヒャクショー　チョーニン　ミナミョージ　ナカッタ　ンガヨー。　昔はねえ。あのう、百姓や町人はみな、苗字がなかったのよ。（老男→筆者）一九七八

これは、「が」準体助詞が、文末詞の一部を形成しているものである。

中村市右山に東隣する高知県幡多郡大方町にも、NHK編『全国方言資料第五巻』によれば、「〜ノガ」「〜ガナ」「〜ガデ」「〜ガヨ」などが認められる。

これら2地よりもさらに東方の高知市内でも、「が」準体助詞の生活は、生きがよい。それは、ごく自然に使われている。[注(3)]

○ボクラモ　イクンガヤケド　ネー。　僕らも（駅）行くところだけどね。高知市はりまや町（30代男→筆者）一九七八

○コラー　オランガジャ。　これは私のだ。高知市一宮字前岡（老男）一九七八

さらに、「が」の命脈は、山陰にもたどられる。鳥取市湖山町に、純然たる準体助詞としての「ガン」が存する。

○ウラガンダ。　（これは、）私のものだ。（老男）一九七七

以上の分布事態から推して、日本語方言上における「が」準体助詞の分布を、次のように解釈することができる。

○まとめ

かつて、準体助詞「が」は、日本語方言上、広く、東海・東山・関東・近畿・北陸・四国・中国・九州などに分布していたであろう。しかし、交通の頻繁な東海・東山、近畿、瀬戸内海域や山陽では、街（水）道筋から順に、ことごとく、それが消退していったであろ

う。そして、今日北西の能登半島周辺域、山陰、四国の佐田岬半島周辺域および高知県域および九州域に、離れて、「が」準体助詞が、いわば周圏的な、辺境遺存の分布事態を見せる結果となっている。

（注1）「が」準体助詞についての考え方は、橋本進吉博士の文法論に依った。しかし、それを連体助詞の一つ（西田直敏『岩波講座日本語7、文法Ⅱ』昭52）と観ることも可能であり、格助詞「が」の一用法と解することもできる。

（注2）中部地方域の方言全体を対象にして、「が」準体助詞の用態を考察した論考は、筆者は知らない。ただし、北陸に限定して、その隆盛な当該事象に言及した研究文献には、次のようなものがある。

1 石川県教育会『石川県方言彙集』明治34
2 富山県教育会『富山縣方言』大正8
3 渡辺慶一『新潟県頸城方言集』昭和13
4 小林存『越後方言七十五年』（新潟県常民文化叢書第三編、昭和26）
5 岩井隆盛「石川県金沢市三一番丁」（『日本方言の記述的研究』昭和34）
6 柴田武編『方言の旅』――北陸道の巻、昭和35
7 加藤正信「方言の実態と共通語化の問題点―新潟」（『方言学講座』二、昭和36）
8 藤原与一『方言の山野』昭和48
9 宮崎静子「富山県方言の一研究―富山県方言にみられる「が」音について」（『米沢国語国文』二、昭和49）
10 真田信治「越中五ケ山方言での連体助詞「の・が」」（「金沢大学国語国文学会誌」17、昭和49）
11 真田信治「一集落内における敬語行動」（『日本語と文化・社会』二、昭和52）

（注3）石垣謙三「主格「が」助詞より接続「が」助詞へ」（『助詞の歴史的研究』昭和30）における、「が」主格助詞の接続助詞化のばあいと、抵触することはない。

（注4）主格または連体格の助詞「が」と「の」との、待遇表現上の差異については、国語史研究上、次のように、多くの論考がある。

1 藤原顕昭『古今集註』巻四、文治元
2 ロドリゲス『日本文典』昭和30
3 青木怜子「奈良時代における連体助詞『が』『の』の差異について（「国語と国文学」昭和27）
4 寿岳章子「室町時代の『の・が』」（「国語国文」昭和33）
5 東郷吉男「平安時代の『の』『が』について――人物をうける場合――」（「国語学」75集、昭和43）
6 桑山俊彦「室町・江戸初期における『の』と『が』――上待遇表現場面を中心に――」（「文芸と批評」昭和47）
7 此島正年「『が』の意味用法」（「月刊文法Ⅱ」昭和45）
8 西田直敏「助詞(1)」（『岩波講座日本語7文法Ⅱ』昭和52）

右はすべて、『が』の野卑、『の』の尊重を説いている。

（注5）北陸以外で、主格の「が」と「の」とに待遇差を認めて、報告している文献には、次のようなものがある。

1 藤原与一「文法」（『日本方言学』昭和29）
2 都築頼助「方言の実態と共通語化の問題点—福岡」（『方言学講座』四、昭和36）
3 小野志真男「方言の実態と共通語化の問題点—佐賀・長崎」（『方言学講座』四、昭和36）
4 秋山正次「方言の実態と共通語化の問題点—熊本」（『方言学講座』四、昭和36）
5 藤原与一『方言学』昭和37
6 九州方言学会『九州方言の基礎的研究』昭和44

九州域にも、関東にも、準体助詞「が」が認められるようであるが、いまは、それについて述べない。

（注6）尾道短期大学方言研究会『佐田岬三崎町言語地図』昭和47）の第21図、「来たのに」の老少年層図には、「キタガニ」の全域分布が見られる。

（注7）藤原与一『昭和日本語の方言』第一巻、昭和48には、愛媛県喜多郡長浜町櫛生における、「が」準体助詞のさかんな生活が、詳述されている。

（注8）高知市の南西の「高知県旧高岡郡浦の内村」の方言にも、「が」準体助詞の盛んであることが報告されている。（藤原与一『昭和日本語の方言』第二巻、昭和49）

（一九七七、一〇、二九）

〔付記〕
脱稿後、藤原与一先生にご高覧たまわり、ご教導をいただきました。記して、感謝申し上げます。

——広島大学助教授——